

違いを超えて

奨励	村山 盛葦〔むらやま・もりよし〕
奨励者紹介	同志社大学神学部准教授
研究テーマ	新約聖書学・初期キリスト教

だから、心に留めておきなさい。あなたがたは以前には肉によれば異邦人であり、いわゆる手による割礼を身に受けている人々からは、割礼のない者と呼ばれていました。また、そのころは、キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていました。しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。 実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律すぐめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。

（エフェソの信徒への手紙 2章11―22節）

はじめに

大学で聖書学を教えています。繰り返し痛感することは聖書そのものが内包する多様性です。新約聖書は27の文書からなります。それぞれ異なる著者が異なる時代に異なる人に向けて書いた文書が集成されたものです。そのため、聖書はキリスト教の教えを系統立てて記しているわけではありません。なかには矛盾し合う教えが共存しています。たとえば、マタイによる福音書には「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思つてはならない。廃止するためではなく、完成するためである」（マタイによる福音書 5章17節）、というイエスの言葉が記されています。一方、キリスト教の基礎を築いたパウロは手紙のなかで、「もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまう」（ガラテヤの信徒への手紙2章21節）と語っています。どちらが正しいのでしょうか。どちらを信じたらよいのでしょうか。律法が大切なのか、いや、律法はもうないのか。

隔ての壁

さて、律法というのはルール、法律のことです。ユダヤ教そしてイスラエルの民にとって欠かすことができない重要なものです。民族的・宗教的アイデンティティーを形作っていると言ってよいものです。今日の聖書箇所でも問題として出てまいります。イスラエルの民は割礼を受け、神と契約を結んでいる聖なる民・神の民です。神と特別な関係にあると自負しているグループです。この聖なる民は律法をすべての権威・根拠とします。彼らの対極に位置するのが異邦人で、割礼を受けず、神と契約も結んでいない。律法ももっていないので、当然律法を守っていません。神を知らず、神とは離れて遠くで生きていたグループです。イスラエルの民は神と良い関係を続けるために律法を熱心に守っています。神の民としての自負と使命を自覚しています。私たちにも自分のやり方、ポリシー、こだわりというものがあります。それに基づいて日常生活を過ごし、ある程度納得して生きている。また、そこにはしばしば情熱が伴います。イスラエルの民にとって律法は宗教的・民族的情熱が生み出される源です。そのため全く異なる次元で生きている異邦人たちは、イスラエルの民と敵対することになります。政治的・経済的な要因も関係して、利害が対立し、いがみ合い、お互い不信感を募らせ、敵意が満ちた状況に陥ります。そのような状況にロックされてしまうと、もう身動きができなくなります。私たちの人間関係にも当てはまることです。その状況では新しい関係を作り出すことは不可能になります。疑心暗鬼に陥り、たとえ善意から出た行為であってもそこから信頼関係を構築することは困難となります。ますます不信と敵意が生じます。そして、気がつくとき大きな大きな隔ての壁が作りあげられてしまっている。そのような堅固な壁を誰も壊すことはできません。いや、むしろその壁があるほうが良いと思ってしまう。価値観も信念も異なる相手を分け隔てる壁があったほうが安心ですから。ですので、壁を壊すどころかもっと堅固な壁を築いていくことが正しいと思い込んでいきます。

人の弱さ・愚かさ

渡辺和子さんが『愛することは許されること―聖書からの贈りもの』（PHP研究所 1993年）という本のなかで、人間の弱さ・愚かさのなかでどのように生きていけばよいのか、その道しるべをご本人の経験を交えながら綴っています。渡辺さんはカトリックのシスターでノートルダム清心学園理事長の任を長く務められています。85歳という高齢にもかかわらず、キリストに生きるとはどういうことなのか、今もなお、精力的に説き明かしてくださっています。「許す一念」という文章のなかで次のようなことを述べておられます。 「弱く、不完全な、罪びと同士の集まりである私たちはまず自分たちの弱さを率直に認めてゆくことがたいせつなのです。人間にとって、弱いこと、醜いことは、必ずしも悲しいこと、恥ずべきことではなくて、その弱さ、醜さに徹し得ないこと、それを受け入れないことこそが、悲しいことなのではないでしょうか。そして自分のそのような弱さ、醜さにもかかわらず、無条件に愛してくださる御者（おんもの）があることに気づく時、私たちは救われるのです」（同書 86頁）。

人間にとって、弱いこと、醜いことは、必ずしも悲しいこと、恥ずべきことではない。むしろ、その弱さ・醜さに徹し得ないこと、それを受け入れないことこそが、悲しいことである、と。私が考えるには、この受け入れない態度が敵意という「隔ての壁」を堅固に形作る大きな要因だと思います。自分の弱さ・醜さではなく他人のそれを非難するのが私たちの赤裸々な姿でしょう。そのような状況では到底、和解などあり得ないし、こちらがそのような態度であれば相手も同様の態度でますますこちらに挑んできます。悪循環ですね。 シスター渡辺も若かりしころ、他人に対して不寛容であったそうです。修道院という共同生活で、他人のすること、なすことを心の中で批判し、非難することが多く、苦しんだそうです。そのような悶々とした生活のなかで、一つの言葉に出会い、それが彼女にとって救いとなりました。それは、「この世の中に、神以外のものはすべて被造物であり、不完全なものである」（同書 83頁）、という言葉です。

被造物としての存在

自分と関係が悪い人、敵対する人と、私たちはどのようにうまくやっていくことができるのか。相手が妥協するか、こちらが妥協するか。あるいは、一生付き合わない、という選択もあるかもしれません。ケース・バイ・ケースですが、自分と相手が敵対するという次元から一步離れる、その状況を俯瞰的に見ることが肝要だと思います。なぜなら、同じ次元でいる限り、いがみ合い、対立が深まるばかりだからです。言い換えると、自分が常識と思っていること、社会通念であったり、価値観であったり、それらを一時的に括弧に入れて停止し、別の見方ができはしないかと考えてみることです。そうすれば、今の状況を客観的・相対的に観察することがし易くなり、問題解決のための活路を見いだす可能性が高まるのではないのでしょうか。 これは第三者の見方といましようか、私たちの社会でも、ある二人が敵対している場合、第三者が仲介に入り具体的に調整することはよくあります。これはこれで大切なことですが、同時に信仰をもって歩む者は、分かりやすく言えば、精神的次元で仲介に入ってもら「方」がいると思います。この世間的仲裁が不可能で、敵対する問題が深刻であればあるほど、その必要性が高まると言えるでしょう。その方とは神であり、イエス・キリストです。信仰をもつことでこの第三者の役割を神に委託することができるのです。無論、私が言う神の役割制というのは、宗教を隠れ蓑、あるいは国際政治の政争の道具として利用することではありません。どのような人間も神の前で、すなわち、絶対者を前にしたときに覚える人間側の不完全さ・有限性・そして罪責感のようなもの、あるいは逆に、このようなちっぽけで不完全であるにもかかわらず、今このように生かされているということに対する感謝の気持ち。このことは敵対する相手にも当てはまります。先ほど紹介しましたシスター渡辺が出会った言葉、「この世の中に、神以外のものはすべて被造物であり、不完全なものである」、この言葉が意味するところは、私もそうであるように相手も被造物で不完全であるということです。 小さいころ、よく兄弟喧嘩をしました。親が買ったケーキを兄弟仲良し平等に切り分けて食べる必要があるのですが、どうしても大きさの大小が生じる。そこで、どっちをだれが食べるのか争いになる。さらに、過去の理不尽な出来事などももちだして、より険悪なムードになる。ちょっとしたことが骨肉の争いになっていく（少し大袈裟ですが）。大人になっても基本的にこのロジックは同じではないでしょうか。もちろんケーキの大小では喧嘩はしませんが、別の次元で骨肉の争いをしています。子供はケーキのことに夢中になって争うのですが、そのケーキは親が子供のために買ってきてくれたものです。幸せをもたらすためのものが不幸な結果をもたらす、という皮肉なことになる。子供は親の気持ちなど考えることはできません。自分たちが立っている場所でしか判断することができないからです。でも、一歩下がって周りを見渡すと、あるいはふと立ち止まって考えてみると、自分たちが争っていることは愚かであることに気づくはず。そして、争っている相手も自分と同じ親から愛されている兄弟であることを知るはず。 神は私たちを愛し、豊かな恵みを与えてくださっている。それをどのように受け取り歩んでいくのか、それは人間に委ねられています。神様から与えられている恵みを奪い合い、人間同士が敵視し合うことは神様を悲しませることです。 「被造物」という言葉は聞きなれない、理解しにくい概念です。私たちは母親から生まれてきたので、誰かに造られたというわけではありません。いわば、精子と卵子の結合で生まれてきたわけです。しかし、この言葉が示していることはそのような生物学的な人間理解ではありません。より深い洞察に基づいた人間理解です。あえて言うならば、宗教的な理解です。私たちはふだん自分の力で努力し生きている。自分一人で生きている。それゆえ、自分なりの生き方やポリシー・こだわり・自分なりの価値観をもっています。これらは大切なも

のです。しかし、それが人間関係において相手を非難・攻撃する道具になっているときがある。「私はこうだ」、「私は正しい」、「間違っているのは相手の方だ」、「だから変わらなければならないのは相手の方である」と。そのようなとき、知らずと堅固な「隔ての壁」を作っています。自分の価値観・主義が「規則と戒律づくめの律法」となり、それでもってすべてを査定し、すべてを裁き、それに合わないものはすべて排除する。そこにはもはや多様性の共存への理解はありません。

エフェソの信徒への手紙の4章26節に、「怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません」とあります。良い言葉ですね。相手もまた自分と同様に不完全で限界のある人間であることを受け入れること、そして、相手もまた自分と同じく神に愛されていること、同じ兄弟であること。そのことを想起することで怒りは日暮れには消えていくのです。罪が赦された被造物としてお互いを認識するならば、お互いをいとおしく大切にできる。

冒頭で紹介しましたイエスとパウロの言葉は、解釈の仕方によると永遠に相容れない主張・主義にも発展します。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」（マタイによる福音書 5章17節）。「もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます」（ガラテヤの信徒への手紙 2章21節）。このような言葉が聖書のなかに共存していることに意味があると思います。この事実を真摯に受け入れるならば、「私はこうだ」と一つの主義を立てて、意見の違う人と壁を作ることはできません。今日の聖書箇所で示されたように、キリストはその壁を打ち破るお方であります。そのキリストを救い主として信じる者は、どのように行動すべきか。壁を作るのではなく、共存できる空間・場を整備することが問われているのだと思います。

キリストは絶えず私たち人間が作り出す「隔ての壁」を廃棄する御方です。そして、私たちを何度も新しく造りあげてくれるお方です。偏狭で愚かなことを仕出かしてしまう私たちを、キリストは流された血によって赦し、生かしてくださっています。

2012年7月4日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録